

マーシャル経済学の経済主体

— 改善行為と「埋め込まれた習慣」 —

藤 井 賢 治*

Kenji FUJII

Men in the Economics of Marshall
-Improvement Behaviour and Embedded Custom-

1. はじめに

経済学の初学者を惑わせることの一つに、経済人の仮定がある。経済人は、社会的諸関係からは独立して、自らの選好に基づいて合理的な選択を行う主体として規定される。経済人は経験から抽出された人間ではなく、精密科学としての経済学を構築するために必要とされる方法論的仮説であると説明されて、直ちに了解できる人は、現代経済学を学ぶ素養に恵まれている。経済人を前に逡巡しているようでは、形式論理で組み上げられた理論体系の先端に行くことはできない。経済人について思いまどうことは、必然的に経済学のあり方を問うことにつながるものであり、一編の短文で成し得ることではない。本稿は、マーシャル経済学における経済主体が、スタンダードとされている経済人と比較してどのように異なるのかに焦点を定めて論を進める。

経済学は、他の多くの学問分野と同様、力学的アナロジーを出発点として精密科学化を指向する仕方で、制度化の道を歩んできた。この流れの中で、マーシャル経済学は均衡論的枠組みに合わせて刈り込まれてしまった。筆者のここ数年の関心は、マーシャルの有機的成長論を正しく理解するためには、要素還元主義的な生産力観ではなく、産業組織論的生产力観を前提とする必要があるのではないかということにあった¹⁾。現在の主流派経済学の方法論的特徴である要素還元主義は、生産力把握においてだけ関連を持つのではない。経済主体の要素還元主義的扱い（＝方法論的個人主義）が、経済人概念を生み出している。だとすると、力学的アナロジーに代えて生物学的アナロジーを指向する思考法は、生産力の有機的把握にとどまらず、経済主体の把握においても違いを生み出しているはずである。既存の研究は、マーシャルにおける企業者の役割を指摘するにとどまっているが、本稿は、マーシャルの経済主体が、経済主体一般のレベルで通常の経済人とは異なると主張する。

本稿の論点は、次の2点である。第1点は、マーシャルの経済主体は、知識・組織の不完全性を短期的には与件と見なしながらも、長期的にはこれらの不完全性を克服すべく改善行為に従事する主体として措定されているということである。第2点は、改善行為は自然的あるいは本能的なものとして仮定されているわけではなく、経済主体に「埋め込まれた習慣」しだいであると考えられているということである。

2. 「限界革命」と「経済人」

2-1. ブルートロジーからキャラクティクスへ

「よきにせよあしきにせよ、《限界革命》の一つの際だった貢献は、富の増殖過程としてとらえられた生産から、交換の一側面としての生産に、したがってまた分配問題への専念から資源配分問題への専念に、強調点を移動したところに見いだされる。」(Black et. eds.,1973, 邦訳p.113)

これはジャッフェの言であるが、限界革命の本質を生産から交換への視点の移行に求める同様の見解は、のちにヒックス(1976)によっても表明されている²⁾。交換の論理ですべての行動をカバーしようとするキャラクティクス化は、一挙に進行したわけではない。限界革命は限界効用に基づく消費財の交換価値理論としてスタートしたのであるが、限界革命のトリオ（＝ワルラス、メンガー、ジェボンズ）に共通しているのは、この点だけだとも言える。生産をどのように定式化するかについては、3人3様の方向性が認められる。その後、限界生産力に基づく生産要素価格理論が追加されるのであるが、これは所与の消費財ストックの各用途への配分という形式をそのまま生産に適用し、所与の資源ストックを各産業または各用途に配分するという（言葉は悪いが、安直な）仕方で生産を定式化するものであった。

後知恵でキャラクティクス化の流れを見ると、そ

* 島根大学教育学部社会科研究室

こには、「学問世界における経路依存」と形容すべき力が働いているように思われる。自立した科学としての地位を希求していた経済学者にとって、明解な一つの論理で経済全体をカバーできる分析方法は、抗いがたい魅力をもつものとして映っていたことは想像に難くない。彼らは、生産を所与のストックの各用途への配分という図式にはめ込むことが、消費の場合と比べて、かなり無理があると自覚しつつも、その無理は理論の一般化のためにやむを得ない代償と考えたのではないだろうか。払われた代償とは、生産活動の矮小化である。つまり、現実の生産活動は、長い時間的視野にわたって将来を見通す努力をし、その上でリスクの伴う意思決定を行うという積極的行為であるにもかかわらず、キャラクター化によって生産活動は限りなく消費活動に近いところまで引き寄せられたのである。かくして、経済主体は、消費者も生産者も区別なく、ホモ・エコノミクスで括られることになる。

2-2. キャラクター化の経済人：ホモ・エコノミクス

キャラクター化の経済人の原型は、まずミーズスによって提出された。

「メンガーは経済人を経済の現実の舞台から、抽象化された理論の世界へ移し換えた。彼の目指す経済学の理論は物理学や数学にも似た精密科学の理論であり、設定された仮説から結論部を論理必然的な演繹によって導き出すような理論であった。この仮説の中心におかれたのが、メンガーの経済人である。(中略)メンガーの経済人は現象界から理論を抽象化するための一つの方法的な支点であった。彼はこの支点が、理論形成のための唯一絶対の支点であるとは必ずしも考えていない。またこの経済人は目的合理性一点張りの人間というわけでもない。つまりメンガーの経済人にはいくつもの限定が付され、いわば傍若無人に振る舞うことを妨げられていたのである。ところがこれらの限定はやがて一つ二つと取り払われ、自由の身になった経済人は自らの動き回れるだけの範囲を経済学の領域だと宣言するようになった。動き回れるだけの範囲とは「目的合理的行動」の範囲であり、目的合理的行動が範囲を画す経済学とは「諸目的と代替的用途をもつ希少な手段との間の関係としての人間行動を研究する科学」のことである。」(間宮,1993,pp.46-7)

詳しくは間宮(1993)を参照いただくとして、ここでは次のことを確認したい。「合理的な選択を行う個人」と規定された経済人は、経済行動の一部を説明するという限定的な役割を担って登場したものの、徐々に経済行動

一般を説明するところまでプレゼンスを拡大したということである。すなわち、目的合理的行動としての経済行動は選択と同義であると理解され、選択理論の論理で経済全体をそして将来までを覆い尽くすことができると考えられるようになった。

しかしながら、経済主体の行動が選択のみに縮約されるのは、実は、経済主体のもつ知識および経済主体が直面している市場が特殊な条件を満たしているときに限られる。

2-3. 選択の合理性と知識・組織

選択はすべて合理的である。このとき、合理的であるとは所与の価格で最適な手段が選択されるということである。経済人の原型を提出したメンガー自身は、不完全な組織化と不完全な知識・情報のもとでの合理的選択を考えた。よく組織化された市場においては購入された財は望むならば購入した価格で再販売することが可能であるが、十分に組織化されていない市場においては再販売は無視できない損失を伴う。このような事態を、メンガーは「販売可能性」概念によってとらえようとした⁹⁾。また、個人の主観的な行為における合理性を関心事とし、価格形成に不確定性がつきまとうのは、むしろ当然だと考えていたメンガーにとって、選択は知識・情報が不完全なもとで行われるものであった。

メンガーの意味での主観的・事前的に合理的な選択自体は、別段特別な困難を伴うものではない。しかしながら、主観的・事前的合理性にとどまらず、客観的・事後的合理性を求めるとなると問題は突如として困難を帯びる。客観的・事後的合理性が確保されるかどうかは、選択の前提とした価格が均衡価格であるか否かにかかっている。均衡価格でなかった場合には、選択は客観的・事後的には非合理的だったことになる。したがって、選択の客観的・事後的な合理性を確保するためには、所与の価格が均衡価格であることを保証する仕組みが別途必要になる。主観的・事前的合理性だけなら、組織・知識の状態はいかようでもあり得るが、客観的・事後的合理性まで確保しようとする、完全情報と十分に組織化された市場を仮定する必要に迫られる。この点は、ワルラス体系を点検することで、即座に確認できる。ワルラスの体系が、オークションにすべての財についてよく組織化された市場を必要とすることはすでに周知のことである。それぞれ、オークションは主体のもつ知識の問題を、そして組織化された市場は市場清算(=均衡価格の成立)の問題を回避するために用意されている。つまり、救いの神としてのオークションのおかげで各主体は価

格以外の情報問題に直面しないで済んでいるし、また、よく組織化された市場では、損失を被ることなく均衡価格での再販売が可能のため、事前・事後の不一致は問題とはならない。このような特殊な状況のもとで、経済主体に残された唯一の役割が選択なのである⁴⁾。

ところが、ひとたびオークションの仮定を外すとすると、各主体は価格以外の知識をもつことや、あり得ないほどの情報処理能力をもつことを要求される。仮定の非現実性は問題ではないとする道具主義を盾にこの道を突き進んだのが、合理的期待形成である。他方、オークションではなく、よく組織化された市場の仮定の方を外して、市場が清算されない場合を考察しようとした不均衡動学の流行もあった。市場がよく組織化されていない場合には、販売可能性問題が生じるために、事前と事

後の不一致の可能性への周到な配慮が必要になる。オークションも存在せず組織化された市場も存在しないケース、つまり不完全にしか組織化されていない市場において限定合理性しか備えていない主体が行動するケースの理論化には、手に負えない困難が予想される。

ワルラス的な接近とは対照的に、次節において見るように、マーシャル経済学は不完全な知識と不完全な市場組織のもとで展開されている。もちろん、主体のもつ知識・情報が限定されていること、そして市場の組織化が完全ではないことは、現実認識としては何ら目新しいことではない。われわれの関心は、精密な理論化を断念するという代償を覚悟しながら、マーシャルがこの困難なケースをどのように扱っているかというところにある。

	キャタラクティクス	マーシャル経済学
交換と生産の包含関係	交換の中の生産	生産の中の交換
経済の見方	原子論的経済観	有機体的経済観
生産力把握の仕方	要素賦存量＋技術	要素賦存量＋技術＋組織
経済主体の行動	選択	選択＋改善

図1. キャタラクティクスとマーシャル経済学

※本図は、キャタラクティクスに関する本節の記述、マーシャル経済学に関する次節の記述の要点をまとめたものである。適宜、参照されたい。

3. 収穫逦増と改善・欲望の進化

3-1. マーシャルにおける収穫逦増

通説にしたがえば、マーシャルは限界革命以後の新古典派に属する。したがって、彼の関心の中心には交換があったことになる。しかしながら、筆者は藤井(1993)において、ブルートロジー(富の学)とキャタラクティクス(交換の学)の区別によりつつ、通説とは反対に、マーシャル経済学はブルートロジーとして理解されるべきであることを主張した。彼は、「交換の一側面としての生産」ではなく、交換を再生産過程の一部と見なす見方に立っていたのである。その際の主要な論拠は、マーシャルには二つの競争概念(一つは現在一般的に用いられている価格競争であり、もう一つは、生産力増強をめぐる競争)があり、後者は前者を包含するより広義の競争概念だということにあった。

また、藤井(1995)では、マーシャルが発展の原動力として期待した外部経済とは組織化の進展によってもたらされる経済であったにもかかわらず、後の均衡論化(同じことであるが、キャタラクティクス化)のためにその組織論的意味が消失してしまったことを論じた。マーシャルにおいては、生産力が生産要素の投入量と技術によって一義的に決定されてしまう要素還元主義的な生産力把握とは異なり、企業は内部組織的にも、外部(市場)組

織的にも効率化の余地を抱えている。内部組織的には、個別企業の生産力は組織編成の良否に起因する効率性および企業者の組織運営の力量も考慮に入れて把握されている。また、外部組織的には、個別企業は一般市場ではなく固有市場に直面しており、販路の開拓には費用を要する。組織化が不完全で、それ故にその改良の余地が存在する状況のもとでこそ、企業が組織内に蓄積した技術・経営知識や、対外的に作り上げた評判や関係(のれん)は経済的価値を有す。このように、内部経済は不完全に組織化された企業を、外部経済は不完全に組織化された市場を前提としてはじめて有意義に論じることができる。

重要なことは、これらの収穫逦増(内部経済・外部経済)はともに、所与の技術と価格のもとで利潤を最大化する生産量を選択するという受動的行為によってもたらされることはないということである。

3-2. 収穫逦増を生み出す改善行為

改善は、選択行為が受動的であるのに対し、積極的行為である。また、その遂行者は企業者に限定されない。知識の改善の主たる部分は労働の質に関わる改善であり、労働モラルの向上、技能習得による熟練の増進といった形を取る。これらの改善は、直接的には生産物の生産効率の上昇や品質の向上となって現れるが、監督費用の

節減を可能にしたり、作業手順の変更を促したりすることで、組織の改善に影響を与える。組織の改善の遂行者は、企業者である。企業者の改善は、直接的には企業組織を良好に管理し、より効率的なものに変えていくところにあるが、分業体制や採用する指揮・管理方式の変更などは労働者のインセンティブ構造の変更を通して、知識の改善に影響を与える。このように、知識の改善と組織の改善とは、一方の改善が他方の改善を促進する相互依存関係にある⁹⁾。マーシャルは、創意工夫を引き出す組織としては、比較的規模の小さい企業を推奨し、大企業においては良好な相互依存関係は維持しがたいと考えていた。また、マーシャルが労働と資本の代替関係よりも補完関係を強調していることも、両者は、動態的關係でとらえたときには、相互の改善を促進する関係にあることに注目していたからに他ならない。

したがって、マーシャルにとって、経済発展は企業家の専有物ではない。また、企業家の機能を革新の遂行のみに局限することもしない。(永澤,1988,p.180) マーシャル経済学においては、革新のみならず、改善という行為が有意味に存在する。これは、しばしば引き合いに出されるシュンペーターと比較するとき、明瞭に了解される。周知のように、シュンペーターは、静態をキャタラクティクスつまりワルラス体系で記述されることを承認した上で、これに企業者の創造的革新機能が加えられることで動態へと移行するというプランを描こうとした。既に論じたように、キャタラクティクスの世界は、完全情報と完全に組織化された市場によって特徴づけられる一つの極限状態であり、そのような世界では主体に残されるのは選択のみとなる。成長の契機は、体系の内部には見いだすことができず、外部から持ち込まなければならない。これが、革新の遂行者としての企業者の由来である。シュンペーター流の華々しい革新とは異なって、マーシャルが期待を寄せている改善行為は、日々の行動の大部分を占めるルーティーン・ワーク（定型的行動）に比べれば、ほんの微々たる存在でしかない。しかし、長期的な視野で見れば、改善行為の累積は無視できない変化となって現れる。

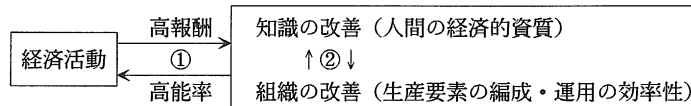
3-3. 改善行為と習慣

長期的な収穫増の源泉は組織化の進展によってもたらされるのであるが、この組織化の進展がキャタラクティクスの世界には存在しない改善行為の存在に負っていることをみてきた。ここで改めて、経済学の出发点にある人間類型について考えてみたい。受動的・積極的を軸にすると、一方の極端に消費型人間を、他方の極端に生産型人間を考えることができる。消費型人間の行動は、所与の条件のもとで最適な配分を選択することにつける。キャタラクティクスの経済人が、この類型に属することはいうまでもない。また、生産型人間の行動は、本能・衝動・優越性の欲求と理由は何であれ、生産すること自体を目的とする。ヴェブレンを創始者とする制度学派的想定する人間類型は、この生産型人間である。現実の人間は快樂を追求する消費型人間と優越性の欲求に動かされる生産型の人間の両面を備えているとしても、単純な人間類型を採用する方が理論的な扱いも容易であるし、明確な命題を導きやすい。

しかしながら、マーシャルは単純な類型化に頼る道を選ばなかった。というのも、人間を固定的にとらえること自体が、リカードと彼の追隨者の陥った悪弊であり過ちであると批判しており、変化する人間を経済学の中に取り込む必要があると考えていたのである。

「リカードと彼の追隨者たちは、議論を単純化するために、しばしば人間を不変量と見なしているかのような扱い方をした。彼らは人間の多様性を研究する努力を十分にすることがついになかった。(中略)しかしかれらが陥った最も致命的な誤謬は産業の習慣と制度がいかに可変性を持つものであるかを考えなかったことである。特に彼らは貧困者の貧困が、貧困の原因である虚弱と非能率の主な原因であることを見ていなかったことである。労働者階級の状態の大きな改善の可能性に対して現代の経済学者たちが持っている確信を彼らは持っていなかった。」(『原理』邦訳1, pp.278-80)

マーシャルは、人間を固定的な人間類型の鑄型にはめ込むことをせず、習慣という定型的行動パターンに従いながらも、改善行為の累積によって緩やかに変化していく存在と見なした。この点を、次節で検証していくことにする。



※知識・組織の改善による生産性の上昇の論理は、企業レベル、産業レベル、一国経済レベルの何れにおいても適用可能である。

※3-1. では主に①を、3-2. では主に②を論じている。

図2. 収穫増と知識・組織の改善

4. 「生活基準」：改善を伴う生活習慣

「富の蓄積は多様な原因によって支配される。慣習によって、自制心と将来を実感する習慣によってとりわけ家族愛のもつ力によって支配される。安全はそのための必要な条件であり、また知識と知性の進歩は、いろいろな仕方ですこれをさらに押し進める。」(『原理』邦訳2, p.150)

4-1. 思考・生活習慣の重要性

人は変わり、また環境も変わる。人は環境を作り、逆に、環境は人を作る。この程度の現実認識は誰でも思い至ることであり、人生訓の域を出ない。環境といっても、それが社会環境一般を意味しているかぎり、有意義な命題とはなり得ない。形而上学や倫理学の研究から経済学研究へ専念する進路決定、あるいは総合社会学ではなく固有の問題領域と方法をもつ自立した学としての経済学を指向したことなどを考えると、マーシャルが、環境の中でも経済環境が重要であると判断していたことは疑いない。さらに、経済環境の中でも、所有関係や分配状態などよりも、日常的な活動(労働と消費)に焦点が当てられる。人は急激な変化を好まないし、また、急には変わらない。日々繰り返される活動を通して、人間の性格が形成されていく。マーシャルが目にしたのは、労働及び消費の習慣性である。

習慣化の意義は、一つは能率に、そしてもう一つは欲望形成に見いだされる。能率に関しては、おそらくマーシャルは、機械化と習慣化との間に類似性を見て取っている⁹⁾。つまり、物的生産過程が機械化・自動化によって労力を節約するように、日々の活動(労働及び消費)においても、より大なる部分を定型化することで、判断の錯誤を減少させ、思考・労力を節約することができるというわけである。欲望形成に関しては、豊かさの増大とともに欲望が高次化していくかどうかは、とりわけ余暇の利用のされ方にかかっているという判断がある。

「不幸にして、人間性は徐々にしか改善できない。そして余暇をよく利用することを学ぶという困難な課題ほど、緩慢にしか学ぶことのできないものは他には存在しない。」(『原理』邦訳4, p.313)

彼のみるところ、労働者が貧しい状態を容易に抜け出せないのは、彼らの生活が非能率を再生産し、余暇を浪費するような悪しき習慣によっているためである。悪しき生活習慣から抜け出すことができれば、下層の労働者も生産能率を上げることができ、より上位の階層へ移ることができる。

4-2. よき習慣と悪しき習慣：「生活基準」と「安楽基準」

マーシャルは、能率を向上させ、欲望の高次化を伴うような生活態度を「生活基準」として、これとは反対の生活態度を「安楽基準」として表現している¹⁰⁾。「生活基準」は、次のように定義されている。

「生活基準という言葉は、ここでは、欲望に対して調整される活動の水準を意味するものとする。したがって、生活水準の上昇は、支出において注意と判断の増大に導き、食欲を満たすだけで、体力を強化することに役立つことのない飲食と、肉体的ないしは道徳的に不健康な生活の様式をさけるように導く、知性と精力と自尊の念の増大を意味するものとする。」(『原理』邦訳4, p.689)

上記からも確認できるように、「生活水準」の向上は、能率の向上とともに欲望の高次化を意味する。言うまでもなく、欲望の高次化というのは一つの倫理的判断である。これを、単純に、理論とは無関係な、ヴィクトリア期特有の道徳観の表明と解釈してはならない。そもそも、はじめに倫理ありきという形での倫理の押しつけは、個人の自由とも多様性とも矛盾する。しかも、個人の倫理的自覚の向上は単独にはこれを望むことはできないという認識こそ、マーシャルを倫理学および哲学から経済学へと導いたのである。これらの事情を考慮するとき、「生活基準」における倫理的言説は、「習慣の埋め込み」¹¹⁾を出発点に、次のように解釈できるのではないだろうか。(図3を参照) マーシャルは、欲望の高次化が、経済的豊かさの増大から必然的に生じるとは考えてはいない¹²⁾。このメカニズムが有効に作用するかどうかは、初発の習慣の埋め込みおよび潜在能力の開発が、適切な仕方で行われるかどうかにかかっている。習慣の埋め込みは、主として教育を通してなされる。

「すぐれた教育は普通の労働者にも重大な利益をもたらす。そのような教育は彼らの知的活動を刺激する。彼らの内部に賢明な探求心を持ち続ける習慣を育てる。彼らを、通常の仕事においてより知的にし、より機敏にし、より信頼できるようにする。労働している時間にも、そうでない時間にも、彼らの生活の格調を高める。」(『原理』邦訳2, p.114)

潜在能力の開発に関しては、労働者の生活について述べている次の引用が、その条件を逆説的な仕方です示している。

「彼らの受ける学校教育は、それが行われている範囲内では、きわめて劣悪であるわけではないとしても、短い期間に限られている。彼らは、人生について広い視野を持つ機会が乏しく、企業や科学や芸術のより高級な仕

事の性質を洞察する機会を持つことが少ない。彼らは人生の早い時期から困難で心身の消耗をもたらす労苦に遭遇し、大部分のものには生涯にわたってそのような状態が続くので、才能と能力を未開発のままに自分たちの生涯を終えてしまう。」(『原理』邦訳4, p.85)

上記からは、開発される能力は専門的職業的能力ではなく、経済生活を賢明に遂行するのに必要な一般的能力であること、そして、身体的のみならず精神的健康を損

なわないような適切な仕方で行われる必要があることが読みとれる。

習慣の埋め込みおよび潜在能力の開発が、上記に述べられた条件が良好に満足される仕方で行われることを、純粋に経済的な投資行動に期待することはできない。マーシャルが初期の人的資本論から、徐々に『原理』の「生活基準」の経済学へと移行したのは、この点に思い至ったためだと考えられる⁶⁾。

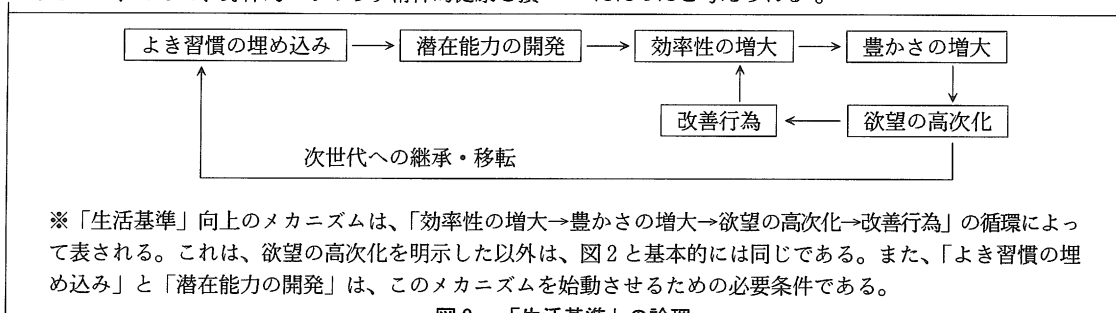


図3. 「生活基準」の論理

4-3. 「生活基準」の上昇：改善を伴う生活パターン

マーシャルは、有機的成長を通して富の増大のみならず人間の資質向上が実現されることを期待していた。この期待が、経済的論理とは関係を持たない、単なる倫理的色合いを添えるだけの素朴な心情吐露でしかないとなれば、その存在は経済理論の場においては正確な理解を妨げる障害でしかない。しかし、これまで見てきたように、事実はそうではない。よき習慣の埋め込みと潜在能力の開発が、前項で述べたような良好な条件下で行われると、「効率性の増大→豊かさの増大→欲望の高次化→改善行為→…」のサイクルが経済主体の中に形成され、自律的に作動し始める。このサイクルが示すように、欲望進化の可能性は、倫理の世界にとどまっていたのでは叶えられず、人間を取り巻く環境（その中でも、経済環境）との相互作用の中ではじめて可能になると考えられている。

人間が経済環境を改善し、改善された経済環境が人間を改善行為に導くという望ましい相互作用は、自然的に始動するものではなく、またその作用は急速ではない。望ましい相互作用は「よき習慣の埋め込み」によってはじめて始動するものであるし、十分に長い潜在能力開発の時間が与えられなければ定着しない。

「いつの時代でもそうであったように、今日においても、社会の再組織について高貴で熱心な提案者は、彼らの想像力がたやすく構想した制度の下で可能になると思われる、生活の美しい絵画を描いてみせる。しかしそれは、人間性が、有利な条件の下でも、一世紀の間に実現

できることを合理的には期待できないような変化を、新制度の下で、急速に実現するであろうとする、隠された仮定に立って組み立てられているという点で、無責任な空想に過ぎない。」(『原理』邦訳4, p.315)

5. おわりに

マーシャルの経済学は、分析の視野が長期化するほどに、生物学的アナロジーの基調を強めていく。一時的・短期的には所与と仮定される与件のうち、長期においては(組織・知識を含む広義の)資本が、そして超長期には経済主体の能力・嗜好が可変的に扱われる。経済主体の能力・嗜好の変化は経済分析の対象とは認められないとする立場の人々は、したがって、マーシャルには超長期の分析は存在しないと批判的に評価している。経済学分析の名に値するかどうかの判断は、経済学の射程をどこまでと考えるかに、さらにこの経済学の射程は経済学をどのような学問と考えるか依存しているのであり、一義的な正答は存在しない。ともかく、マーシャルにとっての経済学は、倫理学の侍女であり、人間の研究を含むモラル・サイエンスであった。

「経済学は一面において富の研究であると同時に、他面において、またより重要な側面として、人間の研究の一部である。」(『原理』邦訳1, p.2)

モラル・サイエンスの一環としての経済学は、演繹的で合理的な数理科学ではなく、むしろ機能的で蓋然的な経験科学を宿命づけられている。

「生物学関係の諸科学の場合には、確実性の支配する

領域は相対的にいって非常に狭い。社会科学の場合には、生命のより低級な状態を取り扱う諸科学に比べて、確実性はさらに小さい。」(『産業と商業』邦訳1, p.232)

本稿では、「生活基準」を中心に、人間の変化に関わる彼の議論の骨格を整理してみた。基本となる考え方は、単に道徳的自覚を個人に求めるだけでは人を向上させることはできないという悲観論ともとれる認識を背景に、人間と経済環境との良好な相互作用のメカニズムを個人の中に埋め込み、作動させるというものであった⁹⁾。たしかに、その議論は精密科学からはほど遠い。何より、欲望の高次化という質的な変化の存在が、定量的分析を困難にしている。しかし、上の引用文に明かなように、人間の資質向上を経済的環境の改善との相互依存関係の中で論じようとする限り、そのような困難は避けることのできない代償だと考えられている。マーシャルの経済主体は、「改善を伴う習慣に従う主体」であり、有機的成長は、見栄えはしないものの日々繰り返される改善行為の積み重ねとして描かれねばならないものだったのである。マーシャルの提供するこのグランド・デザインは、ほとんどの経済主体は受動的行動のみに従事するだけで経済進歩は企業者の革新行為だけで生み出されるというような説明より、はるかに事実に対応しているように思われる。

注

(1)藤井(1989)では組織の意義および企業者の役割を「複合的準地代」を手がかりに考察したが、全くの萌芽的な研究にとどまっている。藤井(1993a)では、ブルートロジーとキャラクターティクスとの区別を援用し、有機的成長は知識・組織の改善を伴うブルートロジーとして理解できることを明らかにした。藤井(1993b)は、マーシャルが明快な資本理論を構築できなかった理由を、有機的生産力観と関わらせながら論じた。藤井(1995)は、力学的分析装置をそのまま経済学に持ち込むという点で圧倒的な優位に立っていたキャラクターティクスの陣営が主流派を形成し、有機的生産力観を表現する適切な分析道具を欠いていたマーシャル経済学までも均衡論的に解釈されるようになったことを明らかにした。

(2)古典派と新古典派の違いをブルートロジーとキャラクターティクスのタームで把握する観点を採用し、マーシャルをブルートロジーの流れに位置づける見方は、徐々に定着し始めているように思われる。筆者〔藤井(1993)〕と上宮(1993)とは、マーシャルの位置づけに関しては全く符合する。また、中野(1991)及び富田(1991)も基本的に同じ見解を共有している。ただし、富田の指摘する

「生産者の観点」(p.29)、「再生産の思想」(p.31)については筆者も同意見であるが、「マーシャルの需給による正常均衡価格の理論は、すでにA・スミスやD・リカードによって論じられた自然価格と市場価格によるところの、スミスのいう有効需要(effectual demand)の原理そのものにはかならない」(p.22)とまで主張することは、『産業経済学』と『経済学原理』との間のギャップを見逃すことになり、マーシャルをあまりに古典派に引き寄せすぎているように思われる。

(3)間宮によれば、メンガーはケインズの貨幣経済理論を先取りしているだけでなく、ケインズ以上に市場の組織化と商品の流動性との関係を明確に認識している。(間宮,1993,p.58)

(4)間宮は、選択は行動とは言えないとして、次のように述べている。「経済学の想定する合理的な経済人は中島敦の『名人伝』の主人公と瓜二つである。(中略)弓の名人が芸道の極意を悟ったときに弓を実際に射するという行為をなくしてしまったように、経済学に登場する消費者や企業も最適な手段を選択したとたんに行方を失ってしまう。」(間宮,1993,p.52)

(5)ここで「複合的準地代」に触れておきたい。筆者は、藤井(1989)および藤井(1993)において、複合的準地代は代表的企業を基準として測ったときの、個別企業の超過利潤部分を指し、長期的にも存在すると主張してきた。他方、坂口(1993)は、複合的準地代を長期的に存在するそのような超過利潤部分を指す用語として理解するのは誤りだとする説を展開している。何れが正しいかは、結局のところマーシャルの用法の検証にかかっているのであるが、本稿に関する限りは、(複合的準地代と呼ぶかどうかは別に)長期的にも存在する超過利潤部分は改善行為によって実現された知識及び組織の優秀性によって生み出されたものであるということが論点である。

(6)これは根拠のない憶測ではない。邦文ではじめて西岡(1993)が本格的に検討を加えた、「機械論」(Ye Machine)の内容は、マーシャルが本格的に経済学の研究を開始する以前の時期に、心理学の立場から人間と機械の異同を考察したものである。西岡によれば、「機械論」では、「感覚→感覚の観念群→行動の観念群→行動」という循環経路を心理的メカニズムの基本的枠組みとしながら、人間行動がいかにして受動的な性格から、熟慮と意志の決定を伴う積極的な性格へと高次化していくかが論じられている。

(7)「生活基準」の理解に関しては、西岡(1985)、近藤(1990)、近藤(1993)を参考にした。

(8)「習慣の埋め込み」は、マーシャルの用語ではなく筆

者の造語であるが、彼の人間観と違うことはないと考える。(前注を参照されたい)人間はプログラムにしたがって作動する高級な機械であり、「習慣の埋め込み」は、コンピューターに基本ソフトをインストールするイメージを表している。

(9)橋本は、これをマーシャルの「実用主義」と表現している。「マーシャルの立場は『実用主義』的なものである。そのことにより彼は『自然主義的誤謬』や『進化論的倫理観』を避けることができた。」(橋本,1990,p.157)

(10)経済学研究の初期のマーシャルは、人間を物的資本になぞらえ、投資対象と見なす人的資本論を展開していたが、『原理』第5版以降に人的資本の定義が撤回されるなど、投資という枠組みで人間を扱うことを断念した。西岡(1985)は、その理由が形式的理由(投資期間が長期であること、投資主体と回収主体が異なること)だけにとどまるものではなく、有機的成長の構想と密接に関連していることを明らかにしている。

(11)楽観的か悲観的かという評価は相対的なものであり、磯川(1993)のように、経済的進歩による人間の資質向上の可能性を信じられなかった徹底した悲観論者たるシジウィックと比較すれば、マーシャルは楽観的ということになる。(磯川,1993,p.113)

参考文献

- 磯川廣「マーシャルとシジウィック—経済学観の相違の源泉について—」井上・坂口(1993)第4章所収,pp.83-119
- 井上琢智・坂口正志編著(1993)『マーシャルと同時代の経済学』ミネルヴァ書房
- 上宮正一郎(1993)「マーシャルとジェボンズ」,井上・坂口(1993)第2章所収,pp.27-51
- 近藤真司(1990)『『生活基準』の経済学』,橋本編著(1990)第3章所収,pp.96-127
- (1993)「マーシャルとJ.S.ミル」,井上・坂口(1993)第3章所収,pp.52-82
- 坂口正志(1993)「有機的成長における複合的準地代の役割」,井上・坂口(1993)第10章所収,pp.230-248
- 富田重夫(1991)「マーシャル的均衡理論の特質と意義」,『三田学会雑誌』,第84巻第1号,pp.21-32
- 永澤越郎(1988)『マーシャル経済学ノート』,岩波ブックサービスセンター
- 中野聡子(1991)「A.マーシャルと功利及び効用の思想」,『三田学会雑誌』,第84巻第1号,pp.64-80
- 西岡幹雄(1985)「マーシャルの人的資本論の展開」『経済学論叢』(同志社大学)第36巻第1号,pp.1-54
- (1992)「マーシャルの初期経済学講義とそ

の草稿について—マーシャル文書の一研究—」『経済学論叢』(同志社大学)第43巻第4号,pp.41-80.

————(1993)「心理学から経済学へ—マーシャルのYe Machineの性格をめぐる—」『経済学論叢』(同志社大学)第44巻第4号,pp.68-91

橋本昭一編著(1990)『マーシャル経済学』,ミネルヴァ書房

————(1990)「産業組織論」,橋本編著(1990)第5章所収,pp.152-178

藤井賢治(1989)「マーシャル経済学における『組織』・『企業者』」,『商経論叢』,第30巻第2号,pp.105-123

————(1993a)「ブルートロジーとしてのマーシャル経済学—組織・知識との関連で—」,『市場社会の検証—スミスからケインズまで—』,ミネルヴァ書房,pp.209-235

————(1993b)「マーシャルにおける組織と分配—自由資本概念をめぐる—」,『経済学史学会年報』(経済学史学会編),第31号,pp.58-66

————(1995)「経済学の制度化とマーシャル評価—研究計画の競合と選択—」,『経済学史学会年報』(経済学史学会編),第33号,pp.79-89

間宮陽介(1993)「経済学における人間—行為の理論のために」,『分岐する経済学』(社会科学の方法第V巻),岩波書店

Black, R. D. C., Coats, A. W., and Goodwin, C. D. W. eds. (1973), *The Marginal Revolution in Economics: Interpretation and Evaluation*, Duke University Press [岡田純一・早坂忠訳『経済学と限界革命』日本経済新聞社,1975]

Hicks, J. R. (1976) "Revolutions' in Economics", in Hicks 1983, *Classics and Moderns, Collected Essays on Economic Theory*, vol. III, pp. 3-17

Marshall, A. (1920) *Principles of Economics*, Eighth Edition, Macmillan [永澤越郎訳『経済学原理』岩波ブックセンター-信山社,1985年]

————(1923) *Industry and Trade*, Fourth Edition, Macmillan [永澤越郎訳『産業と商業』岩波ブックセンター-信山社,1986年]